
1月23日～夕暮れの教室～

p p

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1月23日〰夕暮れの教室〰

【Nコード】

N3894A

【作者名】

pp

【あらすじ】

男子と女子が対立しているため、日常生活に異性と会話のできないような環境の小学校に通う由希。ある日、卒業文集作文が書き終わっていないために男子2人と居残りにされて・・・。

（前書き）

この小説は短編ですが、シリーズのように同じ設定の小説を作っていく予定です。

1月23日。由希は卒業文集の作文が終わっていないため、居残りをしていた。由希のクラス（6年1組）には、他にゴンタ（本名は小野 勇治）とミツツ（本名は光石 和哉）が残っていた。

由希はとても作文なんて書く気には なれなかった。指でシャーペンをくるくる回して遊んでいると、背後で鈍い音がした。

「あつつつ！・・・いけねっ！」

ゴンタが叫んだ。振り向くと、掃除道具ロッカーの上につんであったダンボールが、すべて落ちていた。

「だからやめとけて言ったのに・・・。」

『しかたがないな』という顔をしてミツツが言った。

掃除道具ロッカーの前には、サッカーボールが転がっていた。どうやら、ゴンタはこれをロッカーに向かって蹴っただけらしい。

「お、おい星野。先生にチクるなよ!!」

半分笑いながらゴンタ言った。しかし、ミツツは青ざめている。

由希は何だかワクワクしてきた。男子と女子が会話することは、6年生の間では許されないのだ。

こういう日でないと、男子と話すチャンスなど全くない。

「はいはい、言いませんよ！それより、何か面白いことない？ヒマで死にそう。」

由希はもともとから先生に言いつける気なんてなかった。男子はバカのほうが面白いのだ。

4時になったら家に帰れる。それまで遊んでいれば作文は家で書いて来れるのだ。

ゴンタはミツツを無理矢理引っ張って由希の前に来た。

「んー じゃあ、コイツの好きな人教えてやるよ。」

「や、・・・やめろっ。バカっ！」

ミツツの顔が真っ赤になった。ゴンタは、ミツツの本当に好き

な人を知っているらしい。

本人は言っただけでほしくないようだが、由希は聞きたくてしかたがなかった。

「本当？教えて！」

その一言がミツツにとどめをさした。

ゴンタが口を開いた瞬間、ミツツは魂が抜けたような顔をした。

「コイツの好きな人はな、篠宮なんだぜ！」

由希は大笑いした。篠宮 明日実は、6年生でも指折りのモテる女子だ。

でも、それ以上からかったりいじめたらかわいそうだと思ったから、由希は

「大丈夫だよ、ミツツはスポーツ得意だろ？スポーツ万能はモテるんだぞお？」

と言った。すると、ミツツの顔がもとにもどった。

「・・・ぷつ。」

ゴンタが笑った。目は由希を見ていた。

「そのコイツが好きなやつはお前か？」

幼稚じみた笑いだ。

「バーカ！アタシには好きな人がいますようだ！」

そう軽くきりかえすと、ゴンタの目が輝いた。

「教えてくれよ！」

幼稚ではなかったが、やんちゃぼろずのような言い方だった。

「やなつこった。誰がアンタなんか・・・。」

そう言くと、ゴンタが手を合わせて言った。

「じゃあ、どんな人がタイプ？それだったらいいだろ？」

由希はそれくらいいいと思って、

「勉強ができて、外見が悪くはない人かなあ。それから、やさしい人！」

と言った。これくらいで誰が好きかがわかったら、たいした頭をしているはずだ。

よりによってゴンタのようなバカがわかるはずない。

「んゝ。・・・わかった！まっくんだ！」

まっくん〓松林 直紀。頭が良くてすぐくまじめ。先生と友好的で、顔は悪くない。母親はハーフ。

由希はびっくりした。凶星だったのだ。「勘の鋭いやつゝ！」そう思った。

「ち、ちがう！ちがうよ！」

あわてて言ったから、凶星なのがまるわかりだった。

「ははゝん。凶星だなゝ。」

ゴンタが意地悪く言った。「バレたゝ！」

普通だったらショックなはずなのに、何だかうれしかった。

ゴンタは、何だかフレンドリーな感じがするのだ。

「あ、4時だ。星野、もういいよな？俺達はもう帰るからな。」

ゴンタはそう言うなり、ダンボールを元通りに直し、ランドセルを持って教室から出て行った。

由希は教室に残された。

「私もそろそろ帰るかあゝ。」

由希は大きなのびをして、ランドセルを背負った。窓からゴンタが見えた。ミツツと一緒だ。

由希は微笑んだ。

「ゴンタ・・・。ちょっと、好きなんだよね・・・。」

振り向いてロッカーを見ると、紅い夕日が教室の後方にあたってきれいだった。

「・・・きれいだなあ。ゴンタも見たのかな？」

そう言って教室を出た。校舎も紅く染まっていた。

「さっさと帰るか！」

由希は走りだした。

がバレた。なんとなく不思議な感覚がした。
□

～END～

（後書き）

こんにちは。ピアノシモです！小学生なので、文章力もまだまだで読みにくいところもあったと思いますが、どうかそこは見なかつたことに・・・。
よろしければ感想お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3894a/>

1月23日～夕暮れの教室～

2010年10月17日09時09分発行